ODAWARA LOVELY LIFE LIBRARY

おだわらライブリー通信

小田原の文化資源を発掘する◆小田原市民会館のストーリーを紡ぐ

第七号

「明日のために今日がある。今をたいせつに。」

桑原妙子さん（小田原少年少女合唱隊代表）

小田原城址公園が出来て、すぐに「のど自慢大会」があり、「庭の千草」を歌って、鐘がみっつ鳴りました。

祖母は生け花「小原流」の師範、伯母は裏千家の師範だったので、10歳の時に横浜の三渓園でお茶を点てました。戦後間もなかったので外国の方が大勢写真を撮っていました。生田流のお琴のお稽古もしていたので古稀庵でお琴を弾き、三味線の杵屋響泉先生が御一緒して下さった写真が手元にあります。

生け花、茶道、お琴、それぞれ周りは大人の女性ばかりで、高校3年の時に、その道に進むことに抵抗感を覚え、謀反を起こして6月から音楽の勉強を始めました。東京の家のピアノは焼夷弾で焼けてしまい、家にピアノはなかったので、城内高校の担任の先生が音楽室のピアノを使って良い、と許可をとって下さいました。部活は声楽部で民話を基にした「手古奈」を自主製作しました。女子校なので私は男役でした。

横浜の紅葉坂の県立音楽堂が出来たのもその頃で、高校の音楽の先生が数人を連れて行って下さいました。昔は関所が在ったところで「おしらす」で取り調べが行われていたということですが、駐車場に立っているクスノキは、その頃のことも見ていたのですね。

フェリス女学院短期大学音楽科、専攻科で声楽を勉強。《夏の思い出》を作曲した中田喜直先生や、オペラ《夕鶴》を作曲した團伊玖磨先生、他、素晴らしい先生方の授業は楽しく、時には「お散歩に行きましょう」と学校の傍の元町で、ケーキを御馳走になったりしました。専攻科在学中、付属の音楽教室で指導するようになったのが講師のスタートでした。

小田原市民会館が出来る前は「労音」が盛んな時代で、城内小学校講堂での演奏会の譜めくりや、裏方のお手伝いを数年していました。

小田原音楽連盟の城内高校の佐倉俊子先生、小田原市役所の松本肇さん、吹奏楽研究会の植山達夫先生の3名の方が中心になり「小田原に児童合唱団を作ろう」という企画で、指導を依頼されました。各学校の先生が声を掛けて下さり、会費が300円だったので「そろばんより安い」ということで第1回目の新玉小学校での練習には100人以上が集まり「おお牧場は緑」と高らかに歌いました。58年前から現在まで、運営は保護者のボランテイアで行われています。

戦時中に、東京から小田原の「なりわい交流館」がある地域に疎開し、御堀端幼稚園に数日間、通いました。小田原も連日空襲が激しかったので、鴨宮の祖母の家に移り、防空壕の中で母、叔母、兄、従弟たちとシューマンの「流浪の民」を歌ってB29の爆撃音が静まるのを待っていたのが合唱の初体験です。

食べ物のない時代で、食券を貰って「だるま」に並び、一番おいしものを最後に取っておいたら、残したと思われて下げられて、泣いてしまいました。

桑原妙子先生の少女時代
（80歳バースデーコンサートパンフレットより）

■桑原妙子先生　プロフィール

フェリス女学院大学音楽学部講師（1979年～1995年）

朝日カルチャーセンター講師（1985年～）

神奈川県合唱連盟理事長（1990年～1994年）

神奈川県合唱連盟顧問（1995年～）

神奈川県立音楽堂おかあさんコーラス顧問（2017年～）

小田原少年少女合唱隊を1963年から指揮する他、マルベリー・クワイア、マルベリー・メール・クワイア、マルベリー・チェンバークワイア、しほみコール、Voce di Carillon等を指揮。NHK音楽コンクール審査員、インドネシアITB国際合唱コンクール、宝塚国際室内合唱コンテスト審査員。チェコ・プラハ国際合唱コンクール最優秀指揮者賞受賞。

古稀庵にて、三味線方 杵屋響泉さんとお琴で共演
（80歳バースデーコンサートパンフレットより）

小田原市民会館での１９６５年の「湘南合唱祭」で、講師の磯部俶先生から「日本は、児童合唱団の歴史が浅いけど頑張って」と励まして頂きました。

練習所は新玉小学校、旧中央公民館、聖十字教会、新玉幼稚園など。その後２０年間は「報徳綿」の工場の食堂（現在の県の合同庁舎）で練習し、現在は、さがみ信用金庫本店を使用させて頂いています。

１９７９年、ウイーン国際合唱コンクールに参加したのが、初の海外演奏旅行です。さがみ信用金庫理事長の原元助氏の支援を頂き７０名で参加することができました。コンクール終了後、シェーンブルン宮殿の傍のピアニストのヘルムート・ドイチュ先生のお宅で、皆で先生のピアノを弾いたり、踊ったりして遊びました。

１９９２年の世界音楽教育者会議ソウル大会も思い出があります。日本語禁止の時代だった為、歌詞のない曲を演奏しました。アンコールで歌った「アリラン」で、空気が変わり、音楽の持つ力を肌で感じました。

１９９６年、チェコ・オンドラシェク合唱団３０周年記念招待演奏会でも歌いました。前年の１９９５年に、イタリアのアレッツオ国際合唱コンクールで仲良しになった合唱団の招待を受けて真冬の大雪のチェコで数回一緒に演奏をし、友情を深めました。

１９９８年には、チェコ・オンドラシェク合唱団の皆さんをお招きし、小田原少年少女合唱隊の３５周年記念を小田原市民会館、鎌倉芸術劇場、東京のカザルスホールの３回公演を一緒に演奏しました。９６年～９７年に招待して頂いた交歓です。

合唱隊デビューの貴重な１枚（合唱隊より）

１９９９年の世界音楽教育者会議北京大会では、各国から２０００人が集まり、揃いの黄色いＴシャツを着用、万里の長城が真っ黄色になりました。国賓待遇にも関わらず、韓国と同じく、反日感情を痛感しました。

２００１年、ソングブリッジ＋世界児童合唱祭カナダ大会（アジア代表）。南アフリカ、イスラエル、カナダ、小田原の４大陸代表の合唱団が１週間、寝食をともに合同合宿をし、「歌の力で世界に平和の輪を作ろう」という濃密な経験をしました。

２００２年、カナダで仲良しになったイスラエルの合唱団を小田原に迎えた時は市役所に抗議の電話が数多く入り、宿泊所と演奏会場には私服警官が付き添って下さいました。報徳二宮神社を見学した時に「日本人は、寺と神社と教会に行くのか？　神は唯一ではないのか？」と質問されました。彼女たちはイスラエルに帰国後に兵役の義務があり、軍隊に入るということでした。

２００７年にお招きしたポーランドの合唱団の子どもたちは、宿舎の尊徳記念館の障子を初めて見て、破くことの面白さに、全部をビリビリにして、知らん顔をして、バイバイしました。

昭和４８年８月の広報おだわらから
チャリティーコンサートは今も継続している

２００９年、中国の合唱団の演奏会では、二宮神社の厨房のシェフが合唱団と同じ深圳の出身だったので、大いに盛り上がりました。

２０１１年、インドネシアはＩＴＢ国際合唱コンクール審査員をしたことが、きっかけとなり来日しました。皆さん菜食主義の為、食事の準備が大変でした。

２０００年には、東京駅の構内で、北原白秋童謡コンクールのＰＲの一環として歌いました。エキコンの前には東海道線の車内にポスターが貼られ、乗客が「へ～～」と見ていました。

小田原駅から特別に童謡専用列車が出発し、東京駅での本番では、作曲家の湯山昭先生や、作詞家、絵本作家の、こわせたまみ先生も聴いてくださって、メンバーは大いに張り切りました。

国内外で活躍する小田原少年合唱隊は「広報おだわら」でも
たびたび特集された（↑平成１８年、↓平成１４年）。

小田原市民会館の開館記念事業のひとつ、ピアノ開きコンサートでは、超有名なピアニストの安川加寿子先生の演奏を楽しみに、２階席最前列の中央で聴きました。でも期待とは違って音が思うように響いてこない。「新しいピアノは余程、弾き込まないと響かない」ということを学びました。

２０１３年の青島広志先生演出の「ヘンゼルとグレーテル」は、いつもの市民会館ではないような照明、舞台セットでした。合唱隊のメンバーも出演させて頂きましたが、本番前のレッスンでは、要点を簡単に指摘して頂き、短時間で濃厚な指導に、頭が下がりました。

市民会館は、歌舞伎の為に回り舞台がある、という特徴を持っているホールです。浮世絵「酒匂の渡し」の緞帳も素晴らしいデザインです。近年になって丸い響きも出て来て、見た目を除外すれば良いホールだと思います。

舞台スタッフの東京舞台照明の皆さんには言葉にならない程、お世話になりました。特に照明担当の和田さんというスタッフの方にはお世話になり、ステージで花束を贈呈したこともあります。市民会館を異動されたスタッフさんも、みなとみらいホール、横須賀芸術劇場、戸塚さくらホール、他、いろいろなホールで「前に小田原でお世話になりましたね」と、お会いすることがあり、嬉しくなります。

市民会館のだるま食堂の皆さんにも、古希コンサートの打ち上げで、バースデイケーキをプレゼントして頂いたり、チェコの合唱団が来た時には「オムライスは日本だけのメニューなので、お願いします」と沢山のオムライスを用意して頂いたり、全面的に協力して頂きました。

東日本大震災の後に、市内全部の施設が使えませんでしたが、市民会館の小ホールだけ使わせて頂きました。電気使用抑制で、暖房が入らなかった為、オーバーを着て、ホール後方の調光室の下で歌いました。とても良い響きでビックリしました。

クリスマスコンサートでは「あしながおじさん基金」の為に寄付金を集めて寄付をしています。その表彰式が小ホールで開催され、市長メッセージや表彰式、レセプションの会食も小ホールの思い出です。

練習時は高学年が低学年の世話をする為、毎回の練習が教育実習の状態です。進路は音楽に進む以外に保育士、看護師、教師の道を選ぶ人が多く、歌うことだけではないことが証明されていることに喜びを感じます。

現在の練習は指揮、音楽監督、指導アシスタントの３本柱で行っています。音楽監督の桑原春子（国際基督教大学卒、ハンガリー政府国費留学リスト音楽院卒、在英２９年）は毎月イギリスから指導の為に帰国しています。現在（令和３年）はコロナ禍のため、イギリスからリモートで国際バーチャルやイタリア・リミニ国際コンクール等を担当しています。

保護者のボランティアによる運営と後援会の皆様の心強いバックアップに支えられ、キラキラと輝く子どもたちの歌声が、空高く響き渡ることを心から楽しみにしたいと思います。

新しい三の丸ホールは、ロビーや吹き抜けなどの共通スペースを活用して、それぞれの交流もできると良いなと思います。

「明日のために今日がある。今を大切に」をモットーに、三の丸ホールが、前を向いて颯爽と進む若者たちで溢れることを願います。

メサイアと桑原先生の思い出

鮎

桑原先生との出会いは、１９８４年の２０周年記念演奏会でのメサイア（黒岩英臣指揮）にお父さんコーラスとして参加させていただいた時でした。修道士を１０年ご経験された黒岩先生の純粋な音楽が、桑原先生のご指導による小田原少年少女合唱隊の透明な響きによりこの世に降りてきた様な素晴らしい瞬間を共有させていただきました。

当時の報徳綿の練習場で、小さな子ども達をメサイアの世界に導く桑原先生のご指導に感激しました。市民会館大ホールの舞台に乗り切れず、舞台袖の方まで拡がる少年少女合唱隊の皆さんに囲まれ、初心に返って歌わせていただきました。多くのメサイアを聞き、歌う機会の中で私の原点とも言えるメサイアでした。

市民会館でのオーケストラ付きのメサイアの演奏は、１９９９年西湘音楽フェスティバル（栗田博文指揮）、２０１６年市民による小田原音楽フェスティバル（富澤裕指揮）と演奏されますが、小田原少年少女合唱隊の演奏が初めてでは無いかと思います。（アーカイブ隊・髙橋）

１９８４年、２０周年記念演奏会「メサイア」
指揮：黒岩英臣
（小田原少年少女合唱隊ホームページより）

桑原妙子先生と小田原少年少女合唱隊の年表

和暦	できごと
S37	小田原市民会館が開館。安川加寿子先生の市民会館ピアノ開きコンサートを聴く
S38	小田原地区音楽連盟の依頼により「小田原少年少女合唱隊」結成
S40	「湘南合唱祭」で初ステージ。講師の磯部俶先生に励まされる
S41	第１回定期演奏会
S44	東京での初めての演奏。東京文化会館、東日本少年少女合唱連盟合同演奏会
S45	大阪万国博覧会。太陽の塔の前の広場で日本中の児童合唱団が集まって大合唱祭
S47	沖縄本土復帰記念合唱祭
S53	15周年記念演奏会。ピアノ：ヘルムート・ドイチュ
S54	初の海外演奏旅行。ウイーン青少年合唱祭 少年少女合唱隊が小田原市民功労賞を受賞。「音楽を通じ青少年の情操教育に貢献」
S58	20周年記念演奏会。「メサイア」指揮：黒岩英臣 イタリア・アレッツオ国際合唱コンクール　３位
S61	ハンガリー・コダーイ国際合唱コンクール１位受賞記念招待演奏会
S63	25周年記念演奏会。ピアノ：ヘルムート・ドイチュ
S64	スペイン、カントニグロス国際合唱コンクール　３位
H1	トレド大聖堂、モンセラート教会など、音楽史上重要な意味のある教会で演奏
H4	世界音楽教育者会議ソウル大会　日本語の歌詞の禁止時代、アリランを歌って友好 桑原妙子先生が小田原市民功労賞を受賞。「授産施設の園生に献身的に音楽を指導」
H5	30周年記念演奏会。サントリーホール　ピアノ：ヘルムート・ドイチュ サントリーホール主催クリスマスコンサート
H7	イタリア・アレッツオ国際合唱コンクール　マルベリー民族部門１位、合唱隊児童部門４位
H10	35周年記念演奏会。カザルスホール 全日本合唱コンクール全国大会　マルベリー：総合１位、チェンバー：総合３位 クリスマスコンサート　紀尾井ホール　美智子皇后ご臨席、演奏後にお話をする
H11	世界児童合唱祭　北京大会　日本代表　11か国800人参加。国賓待遇を受ける 全日本合唱コンクール全国大会　合唱隊はコンクール史上児童合唱団初の金賞受賞
H13	世界児童合唱祭　カナダ大会　アジア代表　50団体2000人参加 ４大陸代表（南アフリカ、イスラエル、カナダ、小田原）４団体が１週間の合同合宿
H15	40周年記念演奏会。サントリーホール「メサイア」指揮：小泉ひろし　独唱：OB５名
H18	チェコ・プラハ国際合唱コンクール１位、金賞、最優秀発声賞、最優秀指揮者賞受賞
H20	45周年記念演奏会。サントリーホール「レクイエム」指揮：現田茂夫　独唱：OB3名 野口英世アフリカ賞授賞式パンパシフィック・ボールルーム。両陛下の前で演奏
H24	イタリア・リヴァ・デル・ガルダ国際合唱コンクール１位
H25	50周年記念演奏会　Ⅰ東京オペラシティコンサートホール、指揮：沼尻竜典「レクイエム」他 Ⅱ秦野市文化会館、ピアノ：ヘルムート・ドイチュ　Ⅲ小田原市民会館、ピアノ：桑原春子 少年少女合唱隊が市民功労賞特別賞を受賞 「国内外において美しい歌声で人々を魅了し、小田原の国際的な知名度向上に貢献」
H29	ポーランド、オーストリア、チェコ演奏旅行
H30	５５周年＆チェンバークワイア２０周年記念演奏会 客演指揮：シャビエル・サラソラ 友情出演：チェコ・オンドラシェク合唱団　ピアノ：桑原春子
R1	桑原妙子先生80歳バースデーコンサート　ピアノ：桑原春子

“市民会館思い出メッセージ“から

鰤

たくさんの思い出を作ってくれました。
最初の思い出は、中学生の時に河合その子さんのコンサートにお友達と来て、コールアンドレスポンスで目立ってしまい、親衛隊にスカウトされたことです。

あとは新ホールの会議でおじさん達とたくさんケンカをしたこと。あはは。

もう１つは高校生のとき、唯一ヒロインとして大ホールで芝居をしたこと。後にも先にもないわあ。

そうそう、コンテンポラリーダンスのワークショップはすんごく楽しかった―!!

思い出いっぱいです。今までありがとう!!こゆき

59年間ほんとうにお疲れ様でした。
考えたら自分の年齢ともほぼ同じです。
成人式も、本町小学校の同窓会もここでした。
今は亡き父と、「ウルトラセブン・ショー」を見たこともありました。その時は1回目を有料で見て、2回目を歩道橋から見た記憶があります。
国道1号線を東京方面から来たときのランドマークであるだけでなく、小田原のシンボルの役割を立派につとめましたね。
懐かしい思い出ばかりで残念です。
これからはゆっくりお休みください。　R

今から43年前(昭和52年)の早春に市民会館の最上階で結婚披露宴を行いました。

その時の二人(奥さんと私)、そして参列の友人三人が、現在のバンド『プレイバック'70』のメンバーです。『プレイバック'70』は35年間の活動休止を経て、10年前に活動を再開しました。

そして、縁あって小田原市「昼のミニコンサート」にエントリーし、令和2年7月に市民会館の小ホールで収録ライブを行いました。

なぜか、懐かしさと縁を感じる会館でした。

さかのぼること昭和63年10月5日　小田原市制記念事業で文学座記念公演が催され、市民を無料招待して下さったことが有りました。演目は当時看板女優だった太地喜和子「好色一代女」でした。色物をやらせたら天下一品油ののりきった売れっ子女優だけに、行かない手はないと応募させて頂きいそいそと出かけました。客席は満員でした。童女から老婆まで女一代記を見事に演じ分けており見ごたえのあるものでした。

文学座といえば杉村春子が代名詞でしたが、まるでカラーの違う太地喜和子が次期座長候補で、当時彼女はTV番組で「役者は家を持ってはいけないよ!」と教えられ育ったと語っていました。それだけ芝居に一生を捧げ芝居と心中するくらい泥臭く生きた役者さんでした。

残念なことに小田原公演の後、伊豆下田で唐人お吉の公演の最中、車ごと海岸に転落され劇的な最期を遂げてしまわれました。どんな無念だったことでしょう。

時代考証もありますけれど、今時の役者さんは高学歴で語学も堪能で生き方もスマートで2世3世の方達も大勢登場されています。が、今もって彼女を超える女優さんにはなかなかお目にかかれません。芝居そのものもスペクタクルに展開も早く変わってきてはおりますけれど……今頃草葉の陰で勘九郎さんと酒を酌み交わし芝居談義に花を咲かせていることでしょう。

今から32年前、ここ市民会館で、稀有な役者さんの芝居をこの目で観劇させて頂いた幸せを感謝申し上げます。

一三〇〇人ご招待
文学座『好色一代女』
●日時　10月5日(月)　午後6時開演
●会場　小田原市民会館大ホール
●演目　八木柳一郎作・演出による「好色一代女」
●出演　太地喜和子　三津田健　川辺久造ほか
●対象　市内に住民登録している満18歳以上の方
●定員　1300人
●申込方法　9月1日(月)～20日(日)に往復はがきで申込み。（当日消印有効）。往復用に「好色一代女申込み」、返信用に申込者の住所・氏名を明記。はがき1枚で入場1人。
●あて先　〒250-0　小田原市本町1-1-17　小田原市民会館
●問い合わせ　小田原市民会館　☎0465-46

どこから来た？　熊のはく製

鰤

市民会館本館1階エレベーターホールには、大きな熊のはく製があります。キャプションにはこのように書かれています。

この熊は、昭和四七年四月二十二日、北海道の古平郡古平町沖村番屋の沢で、地元の人達六人によって撃ち取られた雄熊(推定年齢十六才、体重四三〇kg)です。

昭和四十二年頃から付近の牧場に出没し、牧場牛十数頭に被害を与えていたが、そのつど攻撃の手を逃れていました。

右後脚には、その時の弾痕が発見されました。又、鼻先には有刺鉄線による傷あともあって、猛威をふるっていたことがうかがわれます。

立派な成獣のはく製は貴重なものだそうですが、このはく製がいつ頃から市民会館にやってきたのか、記録がありません。本館の完成が昭和四十年ですので、開館後十年ほどしてから来たのでしょうか。

ご存じの方がおりましたら、ぜひ情報提供していただけると幸いです。

市民会館が閉館した後は、近隣の博物館に引き取られることが決まっているそうです。

おだわらライブリー通信第七号

■発行　小田原市　文化部文化政策課
■令和2年度文化創造活動担い手育成事業
「市民会館閉館記念事業」報告書
■編集　市民会館思い出アーカイブ隊
髙橋茂樹・諸星正美・冨士原直也
■資料提供／特別協力
小田原少年少女合唱隊ホームページ
https://www.odawarachildrenschoir.com/
桑原妙子先生80歳バースデーコンサートパンフレット
広報おだわら　アーカイブ
■印刷　令和3年3月吉日

■問合せ　小田原市　文化政策課
〒250-8555　小田原市荻窪300番地
電話 0465-33-1706　/ FAX 0465-33-1526